

藤井建設株式会社

代表取締役会長 藤井 正一 氏



茨城県鉾田市に本社を構える藤井建設株式会社は、1973年に創立し、道路や橋梁、防波堤などのインフラ整備から、競技場や道の駅などの施設建設まで、幅広い事業を展開しています。

特に、道路や線路などの橋脚を作る型枠工事では、茨城県内でトップの実績を誇り、北陸新幹線や圏央道、リニア中央新幹線など国内の大型工事も受注しています。

「出来た製品会社の命」を経営理念に掲げ、独自開発した特殊な型枠技術で建造物の新たな可能性を引き出し続ける同社の取り組みを取材しました。

インタビュー日：2019年12月17日
〔聞き手：筑波総研(株) 取締役社長 野口 稔夫〕
〔文・写真：筑波総研(株) 主任研究員 富山かなえ〕

企業概要

本 社：茨城県鉾田市鉾田1068-2 藤井ビル1F

関連会社：昭和建設株式会社、湘栄産業株式会社、
ストウ工業株式会社、特別養護老人ホーム
「藤の家」

創 立：1973年11月

設 立：1979年11月

事業内容：総合建設業(土木・建築・板金・大工・左官・
とび・土工・石工・屋根・タイル・れんが・
鋼構造物・鉄筋・舗装・しゅんせつ・ガラス・
塗装・防水・内装仕上・熱絶縁・造園・
建具・水道施設・管工事業)

従業員数：69名

自社HP：<http://fujigroup.co.jp/>

少年時代の思い出や御社を創業された経緯などについてお聞かせください。

農業で「物事を見極める力」を養う

私は茨城県銚田市で生まれ育ちました。銚田市は農業が有名ですが、私の実家も農家でした。家族総出で多種多様な作物を栽培するほか、牛などを飼育する畜産業も営んでいました。

幼い頃の生活は裕福な暮らしとは程遠く、肥料の購入資金さえ十分ではありませんでした。しかし、私には1つ、他人より優れた能力がありました。それは「物事を見極める力」です。

例えば、ゴボウの状態を見て、私はゴボウが今何を求めているのか即座に判断することができました。その証拠に、ある年、なけなしのお金で購入した肥料をゴボウに与えてみると、通常より何倍も収穫量が増えたのです。

父親は「勝手なことをするな」と怒りましたが、私は細くて長いゴボウを大量に収穫できたことに喜びを感じ、他の作物にも応用していきました。

しかしある日、牛の出荷当日に、愛情を込めて育てた牛が運搬用トラックに乗ることを拒み悲痛な叫びをあげるのを聞いた時、命あるものを相手にすることの重さを痛感しました。

その後ほどなくして、農業と畜産業から身を引く決意をしたのです。

グループ企業を3社所有するまでに成長

その後、私は職人として修業を積み、22歳で藤井建設工業を創立し、当社の礎を築きました。6年後の1979年に、有限会社藤井建設工業を設立、1987年には藤井建設株式会社に組織変更し、現在グループ企業を3社所有するまでに成長しました。



本社ビル外観

事業概要や特に印象に残っている工事、社員への想いについてお聞かせください。

茨城県内における型枠工事のトップランナー

当社は総合建設業として、道路や橋梁、防波堤などのインフラ整備から、競技場や道の駅などの施設建設まで幅広い事業を展開しています。特に、道路や線路などの橋脚を作る「型枠工事」では、茨城県内でトップの実績を誇ります。

当社の技術力は全国的にも高評価であるため、スーパーゼネコンからの発注も多く、現在では、関東地方や甲信越地方など県外の仕事が事業全体の約6割を占めています。

現場が遠方の場合、社員には長期出張を指示しなければなりません。慣れない土地での困難な業務でも、完璧にやり遂げる社員たちの姿勢に、いつも誇らしい気持ちになります。



現場作業の様子 (写真提供：藤井建設㈱)

「リニア中央新幹線」など大型工事を受注

当社は、北陸新幹線や圏央道、リニア中央新幹線など国内の大型工事の受注実績を持ち、将来的には、日本全国への進出も視野に入れています。

特に強く印象に残っている工事は、2015年3月に開業した北陸新幹線の橋梁工事です。雪はあまり降らないと聞いており安心していたのですが、当社が担当した富山県内の現場では、20年振りの大雪に見舞われ、風速20m/sの地吹雪により一晩で資材が雪に埋もれ、日々対応に追われました。

現場が遠方の場合、気候対応などを含めた様々な調整を行わなければなりません。しかし言い換えれば、社員のマネジメント力や技術力、適応力などを高める絶好の機会です。特に若手の社員は苦勞が多い分、大きく成長して戻ってきます。



北陸新幹線の高架工事（積雪の中の現場）
（写真提供：藤井建設㈱）

特許を取得した「自在R型枠」など独自の型枠技術の特徴についてお聞かせください。

美しい曲面を作り出す「自在R型枠」

建設工事では、鉄筋で組まれた建造物の骨組みを囲うように型枠パネルを組み立て、その中にコンクリートを流し込んでいきます。

しかし、型枠パネルの設置や撤去作業には、専門的な技術と多大な労力が必要となります。また、丸みを帯びた建造物を建てる場合、従来の型枠パネルでは多角形に近い形状にするのが限界で、滑らかな曲面を作り出すことは困難でした。

そこで当社は、作業効率を高め、建造物の規模に限らず、表面を滑らかな曲面に近づけることができる型枠パネルの研究を進め、2009年、「自在R型枠」を開発し、組立方法、曲率調整治具とともに特許を取得しました。

自在R型枠では、特殊寸法（幅471mm、314mm）を採用したことで、どんな曲率でも美しく仕上がるほか、高い作業効率を実現したことで、工期を約30%も短縮することに成功しました。

ゼロエミッション、人手不足対策にも貢献

建造物の内外両面に美しい曲面を作り出すことができる万能な自在R型枠に加え、当社独自の「エコプリフォームパネル」を組み合わせることで、型枠工事の新たな可能性を引き出すことが可能です。

エコプリフォームパネルの面板には、透光性が高いFRP（繊維強化プラスチック）樹脂パネルを採用しました。木材パネルの場合、型枠組立後は現場内が暗くなってしまいます。一方、エコプリ

フォームパネルの場合は明るさを維持でき、安全な作業環境を確保できます。また、透明性も高く、外側からコンクリートの打設状況を確認することも可能です。未充填箇所があった場合でも素早く対応できるため、品質向上にも寄与します。

木材パネルを使用する場合、転用回数は限られますが、エコプリフォームパネルは何度も転用が可能です。従来よりも廃材の処理回数が減少し、ゼロエミッションにもつながっています。

また、エコプリフォームパネルのフレームには、リサイクル可能なアルミ合金を採用し、パネル1枚の重量を16.6kgに抑えました。鋼製フレームと比べて約40%軽減したため、大型型枠を組み立てる際の作業負担を軽くすることができました。

さらに、組立方法をシステム化したことにより、作業の難易度は非常に低くなりました。建設業界においても人材不足が叫ばれる昨今、熟練の作業員が少ない現場などで、当社の型枠技術が活躍する日も近いのではないかと感じています。

今後は、当社の型枠技術をより多くの方に知っていただくため、営業活動にも力を入れながら、社会の要望に応じていきたいと考えています。



「自在R型枠」を使用した首都高大大井JCT高架工事
（写真提供：藤井建設㈱）

生産性向上に向けた取り組みや社員教育についてお聞かせください。

「3倍稼げ」＝「今までの既成概念を壊せ」

私は社員に対し、「今までより3倍稼げ」と叱咤激励しています。この言葉の裏にあるのは、「今、懸命に仕事をこなしている状況で、売上を1割伸ばすことは難しい。しかし、3倍を目指すとなれば、根本的に仕事の方法を見直し、変えていく必要がある」というメッセージです。



今後の展望を語る藤井会長

つまり、「マイナーチェンジ」ではなく、既成概念を壊して「フルモデルチェンジ」するためのアイデアを期待しているのです。

企業の価値は「いかに“知恵”を出せるか」で決まります。しかし、社員からの知恵を求める前に、経営者は会社方針をしっかりと示し、一つひとつの状況を見極め、決断する必要があります。

以前、問題を起こした水戸支店を閉店すると決断した際、5名の社員が一気に退職しました。しかし、売上は下がるどころか大幅に増加し、翌年の売上も落ちることもありませんでした。

「良い発想」は、「良い笑顔」から

当社の業務では「報・連・相」に加え、「確認」を追加しています。どの企業でも「部下から報告が上がってこない」という場面がありますが、当社では、上司から部下に確認を行う双方向のコミュニケーションを大切にしています。

また、2か月に1回、土曜日に、「ランチ会」を開催しています。各部署が持ち回りで調理を担当し、グループ企業も含めた全社員で一緒に料理を味わいます。

毎回、本当に美味しく、社員同士の会話も弾んでいます。“良い発想”は、常に、笑顔溢れる明るい雰囲気から生まれてくるため、今後も継続したいと考えています。

ほかにも、1か月に1回、全社員が「人間学」に関する月刊誌を事前に読んで、会議前の30分の時間を使い、各人の感想を発表し合う機会を設けています。

最初は拙い意見しか言えなかった社員が、今では堂々と自分の考えを述べられるまでに成長しました。

社長退任時の想いや今後の展望についてお聞かせください。

後任の社長へ「自分の心臓を渡す」

5年前、ピーター・ドラッカーの「100年続く企業」の本に出会いました。その内容は、カリスマ社長の寿命は30年であること、そして、企業経営学とは私利私欲を捨て、血族を超えた者でなければ100年続く経営は出来ないというものでした。

これを読んだ時、私は自分の事をいっているように思え、遂に苦渋の決断をする決意を決めました。しかし、40年近く暖めてきた社長の座を明け渡すことは、「自分の心臓を渡す」くらい重いものでした。

突然の発表に、家族をはじめ周囲は大変驚き、どこか体調でも悪くしたのか、何か不都合な事でもしでかしたのかと心配されました。

また、この時に専務である息子に社長の座を譲れなかったのは、「獅子の子落とし」とまではいきませんが、まだ社長としての資質に欠けると判断したからです。

トヨタ自動車の現社長である豊田章男氏も下から這い上がって来たと聞いています。当社の専務も将来、必ずや試練を乗り越え、藤井建設の良き後継者になると信じています。

今後の展望としては、県外での工事を積極的に請け負うことで、さらなる事業の発展につなげたいと考えています。そのためにも、グループ企業を含めた全社員とともに知恵を出し合いながら、技術力の向上に向けて邁進してまいります。



藤井会長(中央右)、郡司総務・経理部長(左)、
筑波銀行鉾田支店 佐藤支店長(右)、
聞き手・野口稔夫

この度は、長時間にわたり貴重なお話をお聞かせいただきまして、誠にありがとうございました。御社の今後益々のご発展をご祈念いたします。